

「坪上援助関係論」構築の歩み —社会福祉方法論研究の一視角としての坪上宏研究—

樋澤吉彦

新潟青陵大学福祉心理学科

A History of Development of
“Tsubogami’s Social Work Relationship Theory”
—A Study of Hiroshi Tsubogami’s Social Work Methodology—

Yoshihiko HIZAWA

NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY
DEPARTMENT OF SOCIAL WELFARE AND PSYCHOLOGY

Abstract

The purpose of this paper is to take a historical overview of development of “Tsubogami’s social work relationship theory”, according to Tsubogami’s three periods, which is distinguished by his main life events. In the first period, he was social worker and a researcher in National Institute of Mental Health. It is followed by the second period, when he was a professor in Nihon Fukushi University, and the last period for a patient. A table, which presents his works and biography, is attached at the back of the paper.

It was found through this paper that he was going to overcome two subjects, split between practice and theory, and opposition study on social welfare policies and study on social work. To settle these problems, he had theorized about methodology through the observation in field practices for the first problem, and had introduced “historical viewpoint” into the methods of social work for the second problem.

Key Words

Tsubogami’s Social Work Relationship Theory, Historical Viewpoint,
Spiral’s Social Work Relationship

要旨

本稿は、元日本福祉大学教授で社会福祉方法論研究者である坪上宏氏（以下、敬称略）が提唱したいわゆる「坪上援助関係論」構築の歩みを、国立精神衛生研究所において実践・研究活動を行っていた第1期、日本福祉大学教員時代の肺炎に罹患するまでの16年間の第2期、肺炎罹患後現在までの第3期、という坪上自身による3期の区分にしたがって概観したものである。また参考資料として「坪上宏著作目録及び略年譜」を作成した。

本研究から、坪上は自身の理論展開を通して、第1に実践と理論の乖離状況の克服、第2に社会福祉論のいわゆる政策論と技術論の拮抗状況の克服という2点の課題克服を目指していたことが分かった。坪上は第1の課題に対しては現場実践の丹念な観察から共通要因を探り理論化していく姿勢を一貫して持つことになる。また第2の課題に対しては社会福祉方法論にいわゆる「歴史性」を導入させるという試みを行っている。

キーワード

坪上援助関係論、歴史性、循環的関係

1. はじめに

坪上宏氏（以下、人物敬称略）は、社会福祉方法論研究者として、国立精神衛生研究所（現、国立精神保健研究所、以下精研と略す）社会精神衛生部技官、日本福祉大学社会福祉学部教授を歴任し、現在は精神障害者地域生活支援の民間団体「やどかりの里」（谷中輝雄理事長、大宮市）研究所長として研究活動を行っている。またそれに加えて、先述の「やどかりの里」の実践や、医療機関のソーシャルワーカーが中心となり活動を行っている「実践記録研究会」の活動に、1970年代前半から現在まで継続的にかかわりを持っている。

坪上は、社会福祉方法論の中心に援助関係を位置づけ、自身の援助関係論（以下、坪上援助関係論と略す）の中核概念として「循環的関係」概念を提起する。この「循環的関係」とは、援助者が被援助者と援助関係を構築していく際、援助者の「都合」だけで被援助者をとらえるのではなく、援助者の「都合」をいったん保留し、被援助者の言動の背景にある「都合」を通して被援助者を理解し、さらに援助者自身の「都合」を見直していくという援助関係である。

筆者はこれまで、ソーシャルワークの固有性とは何かという問題関心のもと、坪上援助関係論についてさまざまな角度から検討を行ってきた。いわゆる坪上援助関係論は、社会福祉実践者・研究者に広く知られているものの、これまでその内容に具体的に言及した先行研究はほとんどなかった。しかし1998年に『¹⁾援助関係論を目指して：坪上宏の世界』が出版されるなど、今後注目を集めることが予想される。

そこで本稿では、社会福祉方法論研究の一視角として、坪上援助関係論構築の歩みを、坪上による3期の区分にしたがって概観したい。また参考資料として「坪上宏著作目録及び略年譜」を作成し、同じく3期の区分に分けて提示する。なお本稿中「今まで」とした場合は、2000年12月末日までの動向としている。

2. 坪上援助関係論構築の歩み

先述のように坪上は自身の理論構築の歩みを、精研社会精神衛生部技官として実践・研究活動を行っていた1962年（S.37）4月から1976年（S.51）8月までの14年4ヶ月の第1期、日本福祉大学教員として従事したうちの、はじめの16年間にあたる、1976年（S.51）9月から1992年（H.4）9月までの第2期、1992年（H.4）10月から現在までの第3期と、3期に分けています。⁶⁾坪上は、1992年（H.4）10月に重い肺炎を経験するが、これ以降、自身の立場が、研究者から患者へと変化したとするのである。

2-1. 第1期までの歩み⁷⁾（表1）

坪上は1924年（T.13）に東京に生まれる。1945年（S.20）3月には学習院高等科を卒業しているが、同年1月から8月まで学徒兵として内地出兵している。その後1946年（S.21）に東京大学経済学部に入学する。坪上は東大生時代に、後に坪上援助関係論構築に大きな影響を与えることになる西洋経済史学者大塚久雄の講義を受講している。坪上は、その後の大学教員時代に、「資本主義の発達段階に応じて社会福祉をとらえ」という歴史的観点を取り入れた社会福祉方法論講義の模索の時期に、大塚の「社会科学における人間類型」の所論を援用するという試みを行っている。

東大に入学したものの、1948年（S.23）頃坪上は肺結核を患い、このときから3度の手術と5年間にわたる入院、約10年間にわたる療養生活を余儀なくされることになる。1951年（S.26）には結核療養のため、東大を中途退学している。この療養中坪上は友人の紹介で、当時白十字病院医師であり、シュワイツァー研究の第一人者であった医師野村実に出会う。坪上はこの野村に「すっかり魅せられ」ことになる。死と隣り合わせの闘病生活のなかでの野村との出会いは、坪上に「援助関係」の重要性を患者という立場で実体験させ、その後の援助関係論構築に大きな影響を与えたと考えられる。

結核が徐々に回復に向かっていた頃、坪上

はある保健系雑誌に紹介されていた医療ソーシャルワーカーに関する記事を読み、ソーシャルワーカーを目指すことになる。そして1953年（S.28）日本社会事業学校研究科に入学、翌年卒業し、また1955年（S.30）には東大経済学部に再入学し、翌年卒業する。その後東大教育学部心理学専攻研究生、白十字サントリウム、電電公社非常勤ソーシャルワーカー等を経て、1962年（S.37）に精研社会精神衛生部技官として就職し、実践・研究活動を始めることになる。

2-2. 第1期

—国立精神衛生研究所時代—（表2）

坪上は精研時代、研究活動のみならず、精神医学ソーシャルワーカーとして相談業務も行っている。

第1期の主要論文としては、「医療社会事業の理念と展開」¹⁰⁾（1967）、「社会福祉的援助活動とは何か：ケースワーク論の再検討より試論へ」¹¹⁾（1970）、「ケースワークの基本的枠組」¹²⁾（1975）等を挙げることができる。

坪上第1期の背景として、この時代の「学園紛争」に象徴される、科学や学問を享受していた者からの学問の世界全体に対する厳しい問い合わせ、すなわち実践を学問に従属させるといった考え方に対する厳しい疑問の噴出という現象を挙げることができる。この時期に坪上は研究者としてこの問い合わせを受け止めることになる。先述のように坪上は、ソーシャルワークの既成の知識や方法・技術の枠組みにとらわれることなく、一見「雑多」な様相を呈している現場実践から共通要因を探り、新たに方法・技術化する姿勢を一貫して持つが、このことは第1期の時代背景の影響が大きいと考えられる。坪上は、1971年（S.46）から、東京の医療ソーシャルワーカーを中心となり結成した「実践記録研究会」に、また1973年（S.48）から、精神障害者地域生活支援のパイオニア的存在である「やどかりの里」の活動にかかわり始め、以後現在まで継続的に交流を持っているが、このことは坪上の一貫した姿勢を体現しているものといえよう。

2-3. 第2期 —日本福祉大学時代—

(表3)

第2期は援助実践からはなれ、大学教員・研究者として活動を行った時期である。

第2期の主要論文としては、「社会福祉の方法・技術：援助活動における関係と人間像の問題を中心に」¹³⁾（1979）、「社会福祉実践における『技術』の意味」¹⁴⁾（1981）、「精神障害者とは：精神医学ソーシャルワーカーとは」¹⁵⁾（1982）、「援助関係論」¹⁶⁾（1984）等を挙げができる。

第2期の特徴は、「現場実践」と「社会科学の認識」という「性格の異なる二者」と、¹⁷⁾「方法・技術論」との「切り結び」、換言すれば現場実践と理論の乖離、社会科学的視点と援助関係論的視点の拮抗、という2点の課題克服を目指したことによる収斂ができる。

第1の課題である、現場実践と理論の乖離の課題克服について坪上は、社会福祉実践者の手による実践記録による「経験則」の探求とそこからの理論構築、自前の概念装置の構築、また精神保健福祉分野のソーシャルワーク実践から共通要因を抽出し、そこから実践の志向と精神障害者をとらえる視点の提起等を行う。このような提起の背景には、坪上が常に持ちつづけている疑問、すなわち実践を科学に従属させようとする傾向に対する疑問があった。

第2の課題である、社会科学的視点と援助関係論的視点の拮抗の課題克服について坪上は、「歴史性」の導入、すなわち資本主義の生成・発達段階とそこに見る人間像を反映させた援助関係論の展開を試みる。この難問に対し坪上は、先述の大塚久雄による「社会科学における人間類型の問題」の所論を援用し、相手を「非人間化」する傾向の強い現代市民社会に生きる市民の姿を歴史的観点から浮き彫りにする。そのうえで坪上は、相手を非人間に手段化する要素を含んだ現代市民社会への対処として、「相対的に分離独立している者が相対的に未分の状態にある相手との間に、循環的な性質をおびた関係を成立させることをとおして、一歩づつお互いに分離独立した状態へと向かう努力を重ねる」ということ、²³⁾

すなわち「循環的関係」を土台とした新たな市民社会の形成を提起するのである。

坪上はこの第2期に、坪上援助関係論における最も重要な論文と位置づけられる「援助関係論」を発表している。この論文で坪上は、社会福祉援助活動を労働として捉えその労働の手段として援助関係を位置づける。そのうえで、「一方的関係」、「相互的関係」、「循環的関係」からなる援助関係の3性質を提起し、社会学者真木悠介（見田宗介）による「媒介」にかかわる「二重の疎外」論を援用する。そして「循環的関係」を、援助者を「媒介への疎外」に対する「気づき」へと導き、「変化」の契機となる関係として提示する。²⁴⁾この「援助関係論」の論旨の詳細は別稿等に譲るが、被援助者のみならず援助者も「変化」する主体として位置づけた点は、坪上援助関係論の核となっている。

2-4. 第3期

—「患者」としての時代—（表4）

坪上は1992年（H.4）10月30日、突然の発作におそわれる。その後の診断で、発作のそもそも的原因は肺炎の発症だったことが分かる。坪上はこの出来事から現在までを第3期と位置づけている。

また坪上は、これまで研究・教育に携わってきた日本福祉大学を1995年（H.7）3月に退官し、同年4月より、先述の「やどかりの里」研究所所長に就任し現在にいたっている。研究所では、主に精神障害者の地域生活支援についての研究を行っている。

第3期は、患者という被援助者の立場から援助関係について論じている諸論文と、これまでの歩みを回顧しながら今後の展望を述べている諸論文とに分けることができる。

患者という被援助者の立場から援助関係論を展開している諸論文としては、「病の経験：低肺機能者の立場から」²⁶⁾（1993）、「間接的処遇法再考：神田橋条治氏の『抱える環境』に接して」²⁷⁾（1994）等を挙げることができる。また、これまでの歩みを回顧している諸論文としては、先述した『援助関係論を目指して：坪上宏の世界』のほか、「日本福祉大学における社会福祉方法論教育：1担当者の私見と

して」²⁸⁾（1993）、「援助関係論の歩み：33年の足跡を振り返る」²⁹⁾（1996）等を挙げることができる。

坪上は、肺炎罹患以降、「死を射程に入れることを迫られた」³⁰⁾怖さが自身に居座ることになったと述べている。このような心境の坪上の支えになったものが、精神科医神田橋條治による「抱え環境」の所論³¹⁾であった。

坪上は神田橋の所論を通して、治療の核となるのは患者の「自然治癒力」、「自助の力」であり、それらは「抱え環境」を切り離しえないことを示す。この「抱え環境」の考え方から坪上は、「ワーカーにとって今まで雑用と思われてきたこと」を、「利他の姿勢の観点」と「コトバの本質」とも言うべき観点に立ち返ると、それら全てが「『抱える環境』として、患者の回復に欠かせないものになります」ということが見えてきたと言う。そしてこのことは「間接的処遇法の再発見」につながったとするのである。³²⁾

坪上は第3期において間接的処遇法の再検討という課題を提示して以降、論文等による理論展開は行っていない。しかし、「抱える環境」という様々な環境に支えられ、抱えられながら病と共に存している坪上の現在の生活そのものが、新たな援助関係論の展開であるとも言える。このように考えると、坪上第3期は最も動的な援助関係論の展開が行われている時期といえよう。

3. 結 語

以上、本稿では坪上援助関係論構築の歩みを、坪上の略年譜及び著作目録を提示したうえで概観した。本稿から、坪上は自身の援助関係論の展開を通して、特に坪上第2期の特徴に見られるように、2点の課題克服を目指していたことが分かった。第1の課題は、科学や学問を享受していた者からの、実践を学問に従属させるといった風潮の強かった学問世界への厳しい問いかけ、すなわち実践と理論の乖離状況の克服である。第2の課題は、社会福祉のいわゆる政策論と技術論の拮抗、すなわち社会科学的視点にもとづく社会福祉論者の言うように「援助関係を『いわゆる人

間関係一般』に属するもの」として社会福祉のなかに外層的、現象的にのみ位置付けられるのかという、社会福祉方法論者としての疑問の克服である。³³⁾

坪上は第1の課題に対しては、実践現場を丹念に観察し、そこから共通要因を探り理論化していくという姿勢を一貫して持ちつづけることになる。また第2の課題に対しては、社会福祉方法論に「歴史性」を導入させるという試みを行う。坪上が行ったこの2点の課題克服の方法はそのまま坪上援助関係論の特徴といえる。

坪上は自身の援助関係論に、心理学、精神医学、社会科学等様々な領域における成果を自由に取り入れているが、その源流には、実存主義思想、現象学があると考えられる。筆者は今後、坪上援助関係論をさらに深めるために、この実存主義思想や現象学の坪上理論に対する影響についても検討を行う必要があると考えている。³⁴⁾

なお本稿は、筆者の日本社会福祉学会中部部会2000年春の例会自由研究発表の論旨の一部をもとにしている。

(付記)

本稿執筆直後、「やどかりの里」に勤務する友人より、平成12年12月19日に坪上宏先生がお亡くなりになられたとの連絡を受けました。心からご冥福をお祈りいたします。

(注)

1) 筆者がこれまで、坪上援助関係論について検討・考察を行った論文・報告は次のとおり。

(論 文)

① 『坪上宏援助関係論の特質』、日本福祉大学大学院社会福祉学研究科社会福祉学専攻博士前期課程修士学位請求論文、2000年

② 「坪上宏援助関係論についての一考察：その変遷と特質の検討」、『日本福祉大学大学院社会福祉学研究科研究論集』、13号、日本福祉大学大学院社会福祉学研究科研究論集編集委員会、2000年、23—32ページ

(報 告)

① 「坪上宏援助関係論の特質についての一考察」、日本社会福祉学会第47回全国大会自由研究発表、1999年、川崎医療福祉大学

② 「ソーシャルワークにおける『変わる』ということの意味：坪上宏『社会福祉的援助活動』の検討を通して」、日本社会福祉学会中部部会2000年春の例会自由研究発表、2000年、中京大学

③ 「坪上宏援助関係論に内包する『変化』の意味：『循環的関係』の検討を通して」、日本社会福祉学会2000年（第48回）全国大会自由研究発表（ポスター発表）、2000年、日本女子大学

2) 坪上援助関係論を主に取り上げている研究としては、住友雄資「『気づき』の援助関係論：坪上援助関係論によせて」、川田誉音・大野勇夫・牧野忠康ほか編『社会福祉方法論の視座』、みらい、1996年、77—88ページがある。坪上の社会福祉方法論を「坪上援助関係論」と呼んだのは、筆者の知る限り住友論文が最初である。

3) 文献82。本書は「やどかりの里」創設者（現、理事長）谷中輝雄、日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会元理事長（現、日本精神保健福祉士協会顧問）大野和男らとのてい談を中心まとめられており、坪上の主要論文5編（文献26、40、46、68、71）も収録されている。なお川田、久保による本書書評がある（川田誉音「書評：坪上宏の世界は周りの世界を映し出す」、『響き合う街で』、通巻47号、やどかり出版、1999年、78—79ページ。久保紘章「書評：援助関係論を目指して：坪上宏の世界」、『ソーシャルワーク研究』、25巻、4号、相川書房、2000年、130—131ページ）。

- 4) ある特定の人物の社会福祉理論の検討・考察を通して独自の社会福祉理論を展開している研究は多数あるが、その中でも最近のものとしては、木原活信によるJ.アダムズの研究（『J.アダムズの社会福祉実践思想の研究』、川島書店、1998年）、松本英孝による岡村重夫、考橋正一の研究（『主体性の社会福祉論：岡村社会福祉学入門』、法政出版、初版1993年、増補版1999年。「社会福祉理論研究のための考橋正一略年譜及び著作目録について」、『広島女子大学文学部紀要』、30号、1995年、49—65ページ）等がある。
- 木原はM.リッチモンドの「ある運動（movement）や技術（art）を本当に知りたければその創始者を知るのがもっともよい」（Mary E. Richmond, "A Background for the Art of Helping", in Mary E. Richmond, *The Long View : Papers and Addresses*, Russell Sage Foundation, 1930 (Ann Greer, ed., The Russell Sage Foundation Reprint Series, 1971), p.574）との言葉を結語に引用し（317ページ）、また松本は、考橋理論研究論文において「われわれが社会福祉理論の研究を前進させるためには、まず先達者の研究成果を正しく継承することが不可欠」と述べている（49ページ）。筆者もこのような問題意識にもとづいて本稿を執筆した。
- 5) 「坪上宏著作目録及び略年譜」は、拙稿、前掲書『坪上宏援助関係論の特質』において筆者が作成した「坪上宏年表」の一部を大幅に加筆・訂正したものである。
- 6) 文献77、10ページ。
- 7) 文献82を参考にした。
- 8) 文献69、5—6ページ。
- 9) 文献82、26ページ。
- 10) 文献19。
- 11) 文献26。
- 12) 文献28。
- 13) 文献34。
- 14) 文献40。
- 15) 文献43。
- 16) 文献46。
- 17) 文献40、251—253ページ。
- 18) 文献39。
- 19) 文献48。
- 20) 文献43。
- 21) 文献34、46等を参照。
- 22) 大塚久雄『社会科学における人間』、岩波書店、1977年を参照。
- 23) 文献34、98ページ。
- 24) 真木悠介「現代社会の存立構造：物象化・物神化・自己疎外」、『思想』、587号、22—30ページ、岩波書店、1973年を参照。
- 25) 拙稿、前掲論文を参照。
- 26) 文献68。
- 27) 文献71。
- 28) 文献69。
- 29) 文献77。
- 30) 文献68、82ページ。
- 31) 神田橋條治『精神療法面接のコツ』、岩崎学術出版、1990年を参照。
- 32) 文献71、100ページ。
- 33) 文献46、81ページ。
- 34) 坪上理論の中核概念である「循環的関係」概念については、特にロジャーズ（Rogers, C. R.）のクライエント中心理論（Client-Centered Therapy）やいわゆる機能主義学派の考え方方がその基盤になっていると考えられる。クライエント中心理論や機能主義学派の考え方方は、実存主義思想や現象学をその基盤としている（中園康夫『援助関係の基礎理論—ケースワーク・カウンセリング・ノーマリゼーションを考える—』、相川書房、1996年。ドナルド・クリル／米本秀仁訳「実存主義」、フランシス・J・ターナー編／米本秀仁監訳『ソーシャルワーク・トリートメント：相互連結アプローチ』（上巻）、中央法規出版、1999年、388—437ページ）。

(参考資料) 坪上宏著作目録及び略年譜 作成: 樋澤吉彦

(凡例)

1. 著作目録には、単行本所収論文、研究雑誌所収論文、翻訳書、書評、講演記録、座談会記録、及びその他活字となって発表されているものを含む。学会発表については精研在籍時の報告のみ提示した。各種研究会時の録音テープ、雑誌巻頭言は除いた。著作は原則として筆者が現在までに収集したものを提示したが、収集できなかつたものは確認できた範囲で提示した。
2. 著作には、1、2のように番号を付した。したがって本稿において坪上の著作を引用した際、脚注では引用文献の番号と適宜頁のみ示した。
3. 著作目録は発表年代順に提示した。
4. 著作の表記はそれぞれ以下の通りとし、適宜変更した。また、共著論文・共同研究報告は坪上以外2名まで明記した。

①単行本所収論文

番号「論文名」単行本編著者名「書名」(発行所) ページ

②研究雑誌所収論文等

番号「論文名」雑誌編著者名「雑誌名」巻号(発行所) ページ

5. 略年譜には2000年12月末までの国内の主要動向、及び社会福祉・精神保健福祉の主要動向のみ併記した。略年譜中の邦歴の元号は、大正はT、昭和はS、平成はHとした。

6. 作成にあたっては以下の文献を参考にした。

(著作目録及び略年譜)

- ①「所員研究業績」、「精神衛生研究」、10、12~22、24号、国立精神衛生研究所、1962年~1977年
- ②「坪上宏の年表」、坪上宏・谷中輝雄・大野和雄編『援助関係論を目指して: 坪上宏の世界』、やどかり出版、1998年、338~347ページ
- (社会福祉・精神保健福祉の主な動向)
 - ③碓井隆次編『類別社会福祉年表』、家政教育社、1979年
 - ④河合幸尾「日本における社会福祉の展開」、一番ヶ瀬廉子・高島進編『社会福祉の歴史: 講座社会福祉第2巻』、有斐閣、1981年、80~134ページ
 - ⑤「社会保障年表」、辞典刊行委員会編『社会保障・社会福祉辞典』、労働旬報社、1989年、789~834ページ
 - ⑥大藪元康「21世紀福祉ビジョン策定から介護保険成立までの動向と主要論文」、日本福祉大学社会福祉学会編『真の公的介護保障めざして』、あけび書房、1998年、268~283ページ
 - ⑦高橋一「我が国における精神保健福祉の歴史」、日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会編『改訂これからの精神保健福祉: 精神保健福祉士ガイドブック』、へるす出版、1998年、19~33ページ

(表1)

西暦	邦歴	年齢	坪上第1期までの歩み	
			坪上宏著作目録及び略年譜	
1924	T.13	0	東京都に生まれる。	
1925	T.14	1		
1926	T.15	2	(12月大正天皇没。「昭和」に改元)	
1927	S.2	3		
1928	S.3	4		
1929	S.4	5	(4月「救護法」交付 (1932年1月施行))	
1930	S.5	6		
1931	S.6	7	(9月満州事変)	
1932	S.7	8	(犬飼首相暗殺される (5·15事件))	
1933	S.8	9		
1934	S.9	10		
1935	S.10	11		
1936	S.11	12	(2月陸軍将校によるクーデター事件 (2·26事件))	
1937	S.12	13	東京府立第一中学校入学。 (日中戦争はじまる)	
1938	S.13	14	(3月「社会事業法」交付 (S.26「社会福祉事業法」へ))	
1939	S.14	15		
1940	S.15	16		
1941	S.16	17	(12月日本軍米ハワイ真珠湾攻撃。米英に対し宣戦布告。太平洋戦争勃発)	
1942	S.17	18	東京府立第一中学校卒業。	
1943	S.18	19	(6月学徒戦時勤員体制確立)	
1944	S.19	20		
1945	S.20	21	東京府立第一中学校補習科入学。 1月~8月学徒兵(千葉県四街道陸軍野戦砲学校幹部候補生隊)。 3月学習院高等科卒業。 (8月広島、長崎に原爆投下。日本、ポツダム宣言受諾。太平洋戦争終結。連合軍総司令部(GHQ)設置される) (12月GHQ覚書「救済並びに福祉計画に関する件」)	
1946	S.21	22	4月東京大学経済学部入学。 (9月「生活保護法(旧)」公布 (S.25新法へ)) (11月日本国憲法公布 (1947年1月施行))	
1947	S.22	23	12月「児童福祉法」公布。	

西暦	邦歴	年齢	坪上宏著作目録及び略年譜
1948	S.23	24	3月都立大久保病院にて左肋骨4本形成手術を受ける。 4月肺結核のため東大休学。 9月都立大久保病院再入院。 (国立国府台病院に日本初のP SW置かれる)
1949	S.24	25	結核再発。救世軍病院再入院し、2度目の手術を受ける。 (12月「身体障害者福祉法」公布)
1950	S.25	26	結核再発。白十字病院に入院し、3度目の手術を受ける。 (5月「生活保護法(新)」公布) (5月「精神衛生法」公布。「精神病者監護法」(M.33)、「精神病院法」(T.8)廃止) (10月社会保障制度審議会第一次勧告)
1951	S.26	27	3月肺結核のため東大中退。 (3月「社会福祉事業法」公布) (9月対日平和条約・日米安保条約調印)
1952	S.27	28	
1953	S.28	29	4月日本社会事業学校研究科1年コース入学。
1954	S.29	30	4月から1年間順天堂大学病院神経科実習。
1955	S.30	31	4月東大経済学部再入学(1年間で卒業)。
1956	S.31	32	4月東大教育学部心理学科研究生(1年間)。東大分院にて神経科実習。
1957	S.32	33	
1958	S.33	34	4月白十字サナトリウムM SW(非常勤)。 電電公社嘱託人事相談員。 (12月「国民健康保険法」改正公布)
1959	S.34	35	(4月「国民年金法」公布)
1960	S.35	36	(1月新日米安保条約・行政協定調印) (3月「精神薄弱者福祉法」公布) (7月「身体障害者雇用促進法」公布)
1961	S.36	37	

(表2)

西暦	邦歴	年齢	坪上宏略年譜及び著作目録
1962	S.37	38	4月国立精神衛生研究所社会精神衛生部技官。 7月から休職し、自宅療養。 (論文) 1「ケースワーカーの性格特性について：結核療養所医療ケースワーカーの実態調査の結果より」『社会事業研究』2号(日本社会事業大学社会福祉学会)73-90ページ 2「ケースワークとカウンセリング：医療機関における相談活動について」日本産業カウンセリング協会編『職場と人間関係』3号(圭文館)62-68ページ 3「野放しの精神健康管理：新しい方向と対策」『マネジメント』21巻9号(日本能率協会)68-72ページ (学会発表) ・「内郷市低所得階層の態度形成の背景」(田村健二共同)第35回日本社会学会大会 ・「PSWの実態について」(柏木昭・鈴木浩二ほか共同)第10回日本社会福祉学会 ・「MMPI標準化のための研究(VII)：総括(その1、その2)」(肥田野直・平田久雄他共同)第26回日本心理学会 ・「低所得世帯のダイナミックス構造」(柏木昭・鈴木浩二他共同)日本社会学会
1963	S.38	39	7月白十字病院に入院。入院中にアブテカー著『ケースワークとカウンセリング』の翻訳を行う。 (7月「老人福祉法」公布)
1964	S.39	40	6月精研復職。 11月に発足した日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会(現、日本精神保健福祉士協会、P SW協会と略す)の初代事務局長に。 (翻訳) 4アブテカー『ケースワークとカウンセリング』(誠信書房、原著は1955年) (論文) 5「診断主義と機能主義：アブテカーの所論から」『医療ソーシャル・ワーク』5号(東京都医療社会事業協会)19-21ページ 6「炭礦年の精神衛生構造に関する研究」(横山定雄・田村健二他共著)『精神衛生研究』11号(国立精神衛生研究所、ページ不明) 7「精神医学ソーシャル・ワーカーに関する実態調査：第1報」(柏木昭・鈴木浩二他共著)『精神衛生研究』12号(国立精神衛生研究所、ページ不明) 8「精神医学ソーシャル・ワーカーの実態について」(鈴木浩二・柏木昭他共著)『病院精神医学』9集(ページ不明) (学会発表) ・「東大版総合性格検査(TPI)の作成：その1～その5」(肥田野直・平田久雄他共同)第28回日本心理学会 (3月ライシャワー米大使刺傷事件起る。5月厚生大臣「精神衛生法」改正諮問) (7月「母子福祉法」公布。福祉六法体制へ) (11月「日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会」発足)

坪上宏略年譜及び著作目録			
西暦	邦歴	年齢	
1965	S.40	41	4月 P S W 協会常任理事となる（1974年3月まで）。 (論文) 9「わが国におけるソーシャル・ワークの諸問題」『済生』44号（ページ不明） 10「医療におけるソーシャルワーク：反論・ソーシャルワーカーは果たして不要か」『医療と福祉』2巻12号（川島書店）7—11ページ（川上 武「医療危機とケースワーカー：ケースワーカーは果たして必要か」前掲『医療と福祉』2巻9号2—7ページと、岡田靖雄「精神医療におけるソーシャル・ワーク：精神医学ソーシャル・ワーカーは必要か」同上2巻10号8—12ページに対する反論） (学会報告) ・「TPIコードの研究」（肥田野直他共同）第7回日本教育心理学会 ・「精神分裂病者の社会適応」（柏木昭・齋藤和子他共同）第13回日本社会福祉学会（6月「精神衛生法」改正）
1966	S.41	42	坪上栄子と結婚。 (編著) 11上出弘之共編『精神衛生』（川島書店） (論文) 12「Ⅱ精神衛生をささえるものⅢ社会学的な基礎」前掲『精神衛生』54—66ページ 13「Ⅲ現代社会と精神衛生 Ⅳ日本社会の特色」同上79—85ページ 14「VI精神衛生をどうすすめるか § 43精神衛生活動の手段：カウンセリングとケースワーク」同上191—202ページ 15「講評：依存心の克服を」『医療と福祉』再刊1号（日本医療社会事業協会）16—17ページ 16「面接の態度（その1）：保健活動に関連して」『看護』18巻10号（日本看護協会）59—63ページ 17「面接の態度（その2）：保健活動に関連して」前掲『看護』18巻11号79—83ページ (7月「特別児童扶養手当法」公布)
1967	S.42	43	第3回P S W 協会全国大会で「やどかりの里」創設者谷中輝雄（当時明治学院大学大学院生）と出会う。 10月東大医学部保健学科非常勤講師（1985年3月まで）。日本社会事業大学非常勤講師。 (論文) 18「精神衛生センター運営に関する試案」（加藤正明・高臣武史・玉井収介・柏木 昭・山本和郎共著）『精神衛生研究』16号（国立精神衛生研究所）95—124ページ 19「医療社会事業の理念と展開」日本社会事業大学編『戦後日本の社会事業』（勁草書房）335—354ページ 20「勤労青少年の心理」労働省婦人少年局編『カウンセリングを職場に生かそう：産業カウンセリングの手引き：年少労働一般資料第25集』（労働省婦人少年局）89—137ページ 21「精神障害者の自己決定について」『精神医学ソーシャル・ワーク』1巻2号（日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会）67—68ページ (学会発表) ・「地域指導者の精神衛生についての意識」（柏木昭・今田芳枝他共同）第3回精神医学ソーシャル・ワーカー協会全国大会
1968	S.43	44	(翻訳) 22 T. M. ビング『職場の精神衛生と人間関係』（国立精研所長（当時）笠松章との共編訳、原著は1954年） (論文) 23「地域指導者の精神衛生についての意識：第2報」（柏木昭・佐竹洋人他共著）『精神医学ソーシャル・ワーク』3巻1号（日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会、ページ不明）
1969	S.44	45	(論文) 24「精神衛生に関する地域指導者の意識：福島県原町市における場合」（高臣武史・柏木昭・佐竹洋人・小川武子共著）『精神衛生研究』17号（国立精神衛生研究所）1—31ページ 25「我が国における精神医学ソーシャル・ワークの現状と将来」（柏木昭・佐竹洋人・小川武子共著）『精神医学ソーシャル・ワーク』4巻2号（日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会）26—36ページ (学会発表) ・「社会福祉的援助におけるいわゆる技術論の立場の再検討」第17回日本社会福祉学会
1970	S.45	46	国立精研初代労働組合委員長に就任。谷中を精研の福祉研修にはじめて講師として呼ぶ。 (論文) 26「社会福祉的援助活動とは何か：ケースワーク論の再検討より試論へ」『精神医学ソーシャル・ワーク』5巻1号（日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会）2—12ページ (P S W 協会全国大会シンポジウム記録) 27「パネルディスカッション要旨」『精神医学ソーシャル・ワーク』5巻2号（日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会）2ページ (5月「心身障害者対策基本法」公布)
1971	S.46	47	1967年に東京医療社会事業研究会に集まった有志で結成された実践記録研究会に、この年から参加する。
1972	S.47	48	(6月「老人福祉法」改正（70歳以上の老人医療費支給制度創設）)

西暦	邦歴	年齢	坪上宏略年譜及び著作目録
1973	S.48	49	「やどかりの里」をはじめて訪れる。 精研室長となる。 (1月70歳以上の老人医療費無料化制度発足) (9月「健康保険法」等改正。家族給付率7割。家族高額療養費新設) (10月65歳以上の寝たきり老人に対する老人医療費無料制度を実施) (Y氏、第9回日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会全国大会の場で不当入院を告発)
1974	S.49	50	早川進（故人、元高知女子大学保育短期大学部教授）と現象学研究会を自宅にて開催する。谷中を早川に紹介する。
1975	S.50	51	(論文) 28「ケースワークの基本的枠組」小松源助編『ケースワーク論』（有斐閣）39—61ページ 29「ソーシャル・ワークの意義を問い合わせる」『実践記録：医療相談室からのレポート』5集（実践記録研究会、以下略）72—77ページ (12月国連総会、「障害者の権利宣言」を採択)
1976	S.51	52	9月精研を退職。 10月日本福祉大学社会福祉学部教授就任。 (論文) 30「実践記録からひき出した課題」『実践記録：実践記録の諸課題』6集6—13ページ

(表3)

坪上第2期（1976年（S.51）9月～1992年（H.4）10月）			
西暦	邦歴	年齢	坪上宏略年譜及び著作目録
1977	S.52	53	(論文) 31「甘えの問題：援助活動における価値の問題として」『実践記録：現場からの報告と課題』7集61—67ページ
1978	S.53	54	(論文) 32「精神障害者の福祉と保健」宮坂忠夫編『講座現代と健康別巻3：福祉と健康』（大修館書店）202—223ページ 33「社会資源：その活用を中心として」『実践記録：社会資源に関する考察』8集63—74ページ
1979	S.54	55	実践記録研究会の事務局を日本福祉大学坪上研究室に置く。 (論文) 34「社会福祉の方法・技術：援助活動における関係と人間像の問題を中心に」日本福祉大学社会科学研究所編『社会福祉の明日を』（ミネルヴァ書房）79—99ページ 35「二つの関心：近頃思うこと」『医療社会事業』26巻1号（日本赤十字社）30—38ページ 36「実践記録への二つの関心：近頃思うこと」『実践記録：かわり方を中心にして』9集104—116ページ 37「社会福祉的援助の方法・技術に関する私の関心：私の研究計画7」『日本福祉大学社会科学研究所所報』13号15—17ページ 38「P S Wの歩みと現状：実践報告をとおして」『精神医学ソーシャル・ワーク』13巻19号（日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会）17—27ページ
1980	S.55	56	(論文) 39「実践と理論の間：そのかけはしを考える」『実践記録：実践と実践理論』10集95—106ページ
1981	S.56	57	(論文) 40「社会福祉実践における『技術』の意味」仲村優一監修、野坂勉・秋山智久編『社会福祉方法論講座Ⅰ：基本的枠組』（誠信書房）251—273ページ 41「研究会における実践記録と現時点での課題」『実践記録：その様式化について』11集74—89ページ (5月衆議院「国際障害年に当たり、障害者の『完全参加と平等』の実現を図る決議」を可決) (6月「母子福祉法」改正（「母子及び寡婦福祉法」へ）) (6月臨時行政調査会、第1、第2特別部会報告を了承（老人医療無料制の廃止、年金給付の国庫負担の削減など）) (6月臨時行政調査会第1次答申（児童手当制度の抜本的見直しなど）)
1982	S.57	58	(編著) 42田村健二・浜田晋・岡上和雄共編『精神障害者福祉』（相川書房） (論文) 43「精神障害者とは：精神医学ソーシャルワーカーとは」前掲『精神障害者福祉』94—115ページ 44「学会報告とその後に考えたこと：自己覚知・異和感・記録の条件」『実践記録：その条件に関する考察』12集93—107ページ (3月国際障害者年推進本部、今後10年の「障害者対策長期計画」を決定) (7月「老人保健法」公布)
1983	S.58	59	(論文) 45「時代状況と自己覚知：転向の観点から」『実践記録：条件設定の諸相』13集78—88ページ (3月臨時行政調査会最終答申)

西暦	邦歴	年齢	坪上宏略年譜及び著作目録
1984	S.59	60	(論文) 46「援助関係論」仲村優一・小松源助編『社会福祉実践の方法と技術：講座社会福祉第5巻』(有斐閣) 80—117ページ 47「異質の人の捉え方：人間理解の都合解析論的方法設定の試み」「実践記録：その条件：その遠心と求心」14集116—127ページ (宇都宮病院事件、マスコミで報道される。6月厚生省、精神病院に対する指導監督等の強化徹底についての通知) (8月「身体障害者福祉法」改正（身体障害の範囲拡大）) (8月「健康保険法」改正（被用者本人に定率1割負担を導入）)
1985	S.60	61	(論文) 48「8条件のさしかかった道：貝塚氏の疑問に関連して」「実践記録：条件の意義を問い合わせる」15集86—100ページ 49「実践記録：その方法についての一考察」「ソーシャルワーク研究」11巻2号（相川書房）36—41ページ 50「精神障害者福祉：その接近法についての一考察」「日本福祉大学社会科学研究所所報」35号（日本福祉大学社会科学研究所）1—24ページ (3月宇都宮地裁、宇都宮病院事件で前院長に実刑判決) (5月「国民年金法」改正（基礎年金の導入等）) (7月老人福祉審議会、老人保健制度の見直しに関する中間意見提出（中間施設の必要性等）) (10月厚生省、精神病院入院患者の通信・面会に関するガイドラインについて通知)
1986	S.61	62	P S W協会倫理綱領策定委員会顧問となる。 (論文) 51「治療学の要件と8条件：8条件の診断的色合いについて」「実践記録：時代状況と実践記録」16集132—143ページ 52「人間のとらえ方：精神障害者福祉に関連して」「日本福祉大学社会科学研究所年報」創刊号（日本福祉大学社会科学研究所）84—109ページ (講演記録) 53「講演：やどかりの里の実践を通しての援助者のかかわりについて」「精神障害と社会復帰」6巻2号（やどかり出版）71—75ページ (シンポジウム報告記録) 54「日本福祉大学社会科学研究所主催シンポジウム『日常世界と科学』報告1」「日本福祉大学社会科学研究所所報」40号（日本福祉大学社会科学研究所）1—6ページ (10月国立精神衛生研究所と国立武藏療養所神経センターを統合し、国立精神・神経センターを設置) (12月「老人保健法」改正（一部負担金の引上げ等）)
1987	S.62	63	(論文) 55「『あたりまえの生活』をめぐって：1つの結び」日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会編『精神障害者の「あたりまえの生活」の実現をめざして：医療と福祉の連携をすすめるP S Wの課題』（日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会）161—169ページ 56「意外だったこと」「実践記録：記録者の省察と実践」17集92—98ページ (てい談記録) 57「てい談『生きる』ということとは：疲れとゆとり」（中井久夫・谷中輝雄とのてい談）『精神障害と社会復帰』6巻4号（やどかり出版）40—55ページ (5月「社会福祉士及び介護福祉士法」公布) (6月「身体障害者雇用促進法」改正。「障害者の雇用の促進等に関する法律」へ) (9月「精神衛生法」改正。「精神保健法」へ)
1988	S.63	64	(論文) 58「2つの診断：神田橋条治氏の『精神科診断面接のコツ』に接して」「実践記録：経験の省察と記録」18集111—119ページ (書評) 59「[私の推薦図書] 中井久夫著『精神科治療の覚書』日本評論社、1982刊」「精神医学ソーシャル・ワーク」18巻24号（日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会）72—73ページ
1989	S.64	65	(論文) 60「偏見・差別について」柏木昭監修『くらしの知恵：精神障害者地域ハンドブック』（全国精神障害者家族会連合会）169—173ページ 61「日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会（P S W協会）25年の歩み：歩みに加わった一員の目をとおして」「社会事業史研究」17号（社会事業史研究会）49—64ページ 62「8条件その後：記録集にみられる自分の関心をふり返って」「実践記録：ふたたび実践記録とは：8条件をふまえて」19集120—127ページ (1月昭和天皇没。「平成」に改元) (3月福祉関係3審議会合同企画分科会、厚生省に「今後の社会福祉のあり方について」意見具申) (3月国連「子供の権利に関する条約」採択) (12月「高齢者保健福祉推進10ヶ年戦略（ゴールドプラン）」策定)
1990	H.2	66	(論文) 63「8条件、その順序の検討：課題と便りのつなぎとして」「実践記録：実践の波紋」20集112—115ページ (6月「老人福祉法等の一部を改正する法律」（福祉関係8法の改正）)

西暦	邦歴	年齢	坪上宏略年譜及び著作目録
1991	H. 3	67	(論文) 64 「研究会の存在意義：用語の問題に関連して」『実践記録：方法への关心』21集117-122ページ
1992	H. 4	68	10月30日虚血性発作に襲われる。肺炎罹患。 (論文) 65 「21集にキーワードを尋ねて：生活援助への散策」『実践記録：実践の足跡』22集112-117ページ 66 「『受診・受療援助』事例検討にあたっての3段階：作業を進めるための1方法として」『精神医学ソーシャル・ワーク』29号（日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会）5-12ページ 67 「P S Wの歴史と現状：その倫理的側面から」前掲『精神医学ソーシャル・ワーク』75-91ページ

(表4)

西暦	邦歴	年齢	坪上第3期 (1992年 (H. 4) 10月～現在) 坪上宏略年譜及び著作目録
1993	H. 5	69	(論文) 68 「病の経験：低肺機能者の立場から」『実践記録：実践者さまざま』23集77-83ページ 69 「日本福祉大学における社会福祉方法論教育：1担当者の私見として」『社会福祉方法論の課題：課題研「社会福祉方法論研究会」報告集』（日本福祉大学「社会福祉方法論研究会」）3-10ページ (6月「精神保健法」改正。地域生活援助事業（グループホーム）の法制化。精神障害者の定義) (12月「障害者基本法」成立。精神障害者を障害者として明確に位置付ける)
1994	H. 6	70	(編著) 70 日本社会福祉実践理論学会監修『教材社会福祉実践事例集2：医療におけるソーシャルワークの実践事例』（川島書店） (論文) 71 「間接的処遇法再考：神田橋条治氏の『抱える環境』に接して」『実践記録：組織への关心』24集94-100ページ 72 「いま考える二つのこと：精神科ソーシャルワーカー国家資格化の問題に関連して」『精神医学ソーシャル・ワーク』32号（日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会）31-41ページ (3月厚生省、高齢社会福祉ビジョン懇談会「21世紀福祉ビジョン」発表) (12月「新ゴールドプラン」策定。「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について（エンゼルプラン）」策定) (12月高齢者・自立支援システム研究会「新たな高齢者介護システムを目指して」報告)
1995	H. 7	71	3月日本福祉大学退官。 4月「やどかりの里」研究所長に就任する。 (編著) 73 谷中輝雄共編『あたりまえの生活 P S Wの哲学的基礎 早川 進の世界』（やどかり出版） (対談記録) 74 「対談：早川先生からP S Wへのメッセージ」（谷中輝雄との対談）前掲『あたりまえの生活 P S Wの哲学的基礎 早川 進の世界』123-138ページ (論文) 75 「『あたりまえの生活』について」同上87-120ページ 76 「組織に関する幻想的覚書：記録の8条件再考の手掛かりとして」『実践記録：25年の歩みの現在』25集81-84ページ (7月社会保障制度審議会勧告「社会保障体制の再構築について」報告) (5月「精神保健法」改正。「精神保健及び精神障害者福祉に関する法律」へ) (12月「障害者プラン：ノーマライゼンション7ヶ年戦略」策定。社会復帰施設等の設置目標を明確化)
1996	H. 8	72	(論文) 77 「援助関係論の歩み：33年の足跡を振り返る」川田薗音・大野勇夫ほか編『社会福祉方法論の視座』（みらい）10-21ページ 78 「一つの近況」『実践記録：関わりと中状況』26集63-64ページ (講演記録) 79 「研究会を始めるにあたって：第3回地域精神保健・福祉研究会」「響き合う街で』1号通巻38号（やどかり出版）2-4ページ
1997	H. 9	73	3月胃潰瘍の手術のため入院。 (講演記録) 80 「第4回地域精神保健・福祉研究会を迎えるに当たって」『響き合う街で』4号通巻41号（やどかり出版）4-6ページ 81 「講演：生活をささえるとは」前掲『響き合う街で』86-93ページ (6月「児童福祉法」改正) (12月「介護保健法」成立。2000年4月より実施が決定) (12月「精神保健福祉士法」成立)

西暦	邦暦	年齢	坪上宏略年譜及び著作目録
1998	H.10	74	5月肺炎のため入院。 (編著) 82谷中輝雄・大野和男共編著『援助関係論を目指して：坪上宏の世界』(やどかり出版) (論文) 83「病の経験（その2）：胃潰瘍患者の場合」『実践記録：はざまから』28集59-60ページ (6月中央社会福祉審議会社会福祉構造改革分科会「社会福祉基礎構造改革について（中間まとめ）」発表)
1999	H.11	75	(論文) 84「病床日記」『実践記録』29集72-74ページ (2月障害者関係三審議会「今後の障害者保健福祉施策のあり方について」発表)
2000	H.12	76	12月19日、死去。 (5月「社会福祉の増進のための社会福祉事業法等の一部を改正する等の法律（「社会福祉法」）」等関連8法改正。6月施行)